第８期 第８回 静岡市行財政改革推進審議会　会議録

１．日　　時　令和元年９月10日（火）　13：00～15：40

２．場　　所　静岡庁舎新館８階　市長公室

３．出 席 者　【委員】

田形和幸会長、植田眞委員、内山和俊委員、小泉祐一郎委員、
小島孝仁委員、坂野真帆委員、杉山茂之委員、鈴木貴子委員、
西尾真治委員

【行政】

田辺信宏市長、豊後総務局長、渡辺総務局次長、大長総務局理事、
大石観光交流文化局長、田中観光交流文化局次長、
岩田歴史文化課長、岡村参与兼文化財課長、草分参与兼文化振興課長、
宮本登呂遺跡担当課長兼登呂博物館長、永田芹沢銈介美術館長、
宮原都市局長　他

〔事務局〕

初田総務課長、降矢総務課行財政改革推進係長、金原主査　他

４．会議内容

(1) 開　会
(2) 審議会への諮問
(3) 諮問事項に係る委員と市長との意見交換
(4) 平成30年度行財政改革推進審議会答申に対する施策案について
(5) 第３次行財政改革前期実施計画実績報告について
(6) 閉　会

審議会内容は以下の会議録のとおり

≪略：審議会への諮問≫

田辺信宏市長：どうか活発な議論をしていただき、ぜひ将来のまちづくりに反映されるような答申をいただけることを期待している。釈迦に説法かもしれないが、この審議会の名前

が行財政改革推進審議会となっているが、いわゆる行財政改革というよりも、もう少し大きな視点から今回の諮問をお願いした。従来型の行革審はマイナスをゼロにする。やれ人件費を圧縮せよ、やれ市の職員を減らせと、いわゆるコストカッターの役割としての行革審が多かった。それも必要な時代があっただろう。ただ、令和の時代になり、これからはむしろゼロをプラスにする行財政改革に取り組んでいく時代だ。特に民間の皆さん、経済界の最前線で企業経営をされている皆さんからの発想をいただきながら、どうしたらもっと生産性の高い行政をしていくか、さまざまなものを集約連携する、ネットワーク化するなかで、費用対効果の高い行政をしていくか、そしてその実りとして経済が活性化されたまちづくりができるか。今回の素材は歴史文化資源だ。そんな仕掛け作りについて御指南いただこうということだ。行政の究極の役割は、民間の方々が十全な経済活動ができる都市環境、社会環境を提供して、そこで儲けてもらう。それが経済の活性化につながるわけで、そういう舞台を提供するのが行政の責任だと思っている。民間活力を引き出す環境を作るのが行政の究極の役割だと私は認識している。歴史文化資源という先人から残された地域資源を活用し、さまざまな仕掛けを講ずることによって、地域活性化に役立つような公共資産にするヒントをいただくことが今回の私の諮問の本意だ。ぜひクリエイティブな議論をしていただくことを期待している。

事務局：それでは委員の皆様からも意見をお願いしたい。

小泉祐一郎委員：歴史文化施設は大変期待している。小学校、中学、高校と郷土研究部だった。歴史が好きでいろいろな施設に行くが、博物館相当施設になると思うが、あまりそちらに行き過ぎると、私みたいに好きな人にとっては堪らなくいいが、そういう人の割合は少ない。対象を広く捉えて、あまり興味がないような人でも静岡に来た人が歴史に親しみながら楽しめるような部分があるといい。県などがよく総合博物館を作るが、総合でやってしまうと時代区分で古墳なども。今回は徳川家康とか今川家とか東海道とか、ある程度テーマをはっきりしていただいているところがある。あとは、丸子宿とか、東海道だと蒲原、興津、由比、江尻もある。そういうところにリピーターで、今度はあっちにも行ってみようかなという形でうまくつないでいただきたい。登呂博物館も去年検討したが、テーマ的には登呂まで使えないかもしれないが、駿府匠宿や登呂にも誘えるようなことを期待している。

植田眞委員：７年前に神戸から引っ越してきた。もともと静岡にいた。何が驚いたかというと、京都や神戸はどこにいってもお金を取られる。駐車をしても取られる。静岡に帰ってきてから、どこもタダだ。利用者にとってはいいかもしれないが、これを動かしていくところにとってはなかなかコスト的には難しいのではないか。いま夢テラスの駐車場も全部タダだ。非常にいいことだが、そういうところをお金が取れるところに変えていかなければならないのではないかと思った。

田辺信宏市長：おっしゃるとおり。すごく大事な論点だ。第三者として神戸に御在住のときの目線をぜひ経営感覚の中で御発言いただければ嬉しい。逆にタダの施設を供給してき

た立場の内山委員からお願いしたい。

内山和俊委員：6月23日に田辺市長と行く静岡魅力発見ツアーに参加した。普段見ることのできない、いろいろなものを見ることができた。臨済寺では本堂の中まで入って座禅、呈茶体験をした。それから庭園の素晴らしさ。臨済寺から見る駿府城公園。そういうものが歴史の連続性としてあった。それから、普段は入ることのできない浅間神社の本殿、拝殿の中に、日光東照宮の眠り猫があるが、静岡には目覚め猫というものがあったことが分かった。本殿について、浅間神社、神部神社などがあるが、それぞれの歴史を知ることができた。普段知ることのできない世界に触れた。それから、丁子屋さんの名物のとろろ、いわゆる食も非常に良かった。駿府匠宿でコースターを作ったが、いろいろな制作体験も非常に素晴らしく、子どもさんにも人気があると思う。吐月峰柴屋寺、名前の通り今川時代にできているが、竹が月を吐くようにという説明を聞き、その情景を見ながら今川時代を思い起こした。静岡には普段は気が付かないがもっと深堀するといろいろないいものが出てくることを実感した。これを利用して、もっと静岡の歴史文化施設を中心に歴史観光という分野を展開したらいいと思う。

田辺信宏市長：モニターツアーは市長選の公約の一つで、就任して100日以内に実現するということで観光交流文化局が一生懸命に準備して実現にこぎつけた。参加していただき、その目線でいろいろなアドバイスをアンケートでいただいたことが役に立っている。例えば匠宿のなかで竹細工でコースターを作ったが、安すぎるという声があった。もっとお金が取れる体験ではないかと。いろいろと新しい発見があった。それも今回の諮問のテーマだ。

小島孝仁委員：植田委員と小泉委員とまったく同意見。歴史文化施設という民間では作れないものでいかに利益を上げるか。これが今後維持していく、さらに施設自体を定期的にブラッシュアップしていくための財源として必要だと感じる。不動産業界で土地の価値を計るとき、そこにしかない土地というのは非常に価値があり、利用の仕方も唯一のものができる、それが価値になる。無料だから人が来るという時代でもない。高いお金でもそこに非常に得るものがあれば、逆に遠くからでも来る。良質な方が静岡に訪れてくれると思う。公共の土地や建物の役割は、市民が誇りになるようなもの、遠方や海外から来た人がそこを見ていいね、かっこいいねと言っていただくことが非常に誇りになると思う。誇りは何かというと静岡市のブランドになると思う。一部の本当に歴史が好きな方だけでなく、そうではなかった方、子どもの頃に歴史の授業が嫌いだったが大人になって興味が出てきたような方の入り口になるような施設の作り方。そういうものを作るときには、デザインと遊び心が非常に重要だと思う。

田辺信宏市長：用宗に投資をしてくださっているので、官民連携のケースとして一緒にやっていきたいと思っている。日本通になればなるほど、東京、京都、ディズニーランドのコースでは飽き足りなくなる。静岡という場所を知っているか。そこに用宗という風情のある漁港がある。そこを知って、そこで癒しを受けたりする。私たちにとっては当たり前の

ことがものすごく価値があることに気付かせてくれた。

西尾真治委員：市長から行革が従来型のコストカットではなく新しい視点を切り出していくという話があったが、観光政策も同様だと思う。視点を変えていく必要があると思う。今までの観光政策だと観光客を増やすことが一つのアウトプットだった。しかし本当に観光客を増やすことだけが目標でいいのか考え直す必要がある。例えばオーバーツーリズムという問題がある。観光客がたくさん来過ぎてしまって、かえって居住環境が悪くなる。住民にとって住みにくいし、観光地としても魅力が下がってしまうケースがある。観光客と市民との共生のような概念だ。新しい都市ビジョンを作り、それと合わせながら観光政策を作っていく必要があると思う。例えばフィンランドのヘルシンキでは、2025年までに自家用車がない都市を作ろうということで、車を持たなくても観光客も市民も自由に行きたいところに行けるというビジョンを持っている。いろいろな交通機関、スマホもそうだし、シェアサイクルなどいろいろなものを使いながら自由に行きたいところに行ける。そういう観点が必要だと思う。このペーパーの中にもＭａａＳというキーワードが入っている。そうしたICTや科学技術を活用しながら新しいビジョン、都市像を思い描きながら考えていくことが必要だ。

田辺信宏市長：知っていておっしゃったのか分からないが、私も先々週ヘルシンキに行ってきた。まさに今御説明のことを学んできた。行政だけで行くのではなく、静岡鉄道あるいはタクシー事業者、市議会の有志、共に官民連携で見てきた。ＭａａＳのこれからのモデル都市として国土交通省と経済産業省とタッグを組みながらやっていくつもりだ。このネットワーク化の大事な要素になるため、もしそこまでスコープを広げていただければ、ぜひＭａａＳの件もいろいろと御意見をいただければありがたい。タクシーの相乗りの実証実験もこの秋に静岡市で行う。規制緩和が必要となるが。

鈴木貴子委員：静岡にはたくさんの魅力ある施設がある。ここをもう少し魅力あるものとするためにも、コストを付けてもいいのではないか。タダだと逆にその価値が安っぽく見えてしまうこともある。稼げるところではしっかり稼いでいただく。使えば使うほどダメになることもあるから、修繕コストを確保することも必要だ。そして、静岡に来てもらうのであればやはり情報の発信も必要だ。多くの人が静岡は良いまちだ、富士山がある、食べ物がおいしいと言いながら、なぜかサイトなどを見ていると日本で行きたい場所のトップテン、日本のおいしい場所のトップテンに静岡が入っていない。皆が良いと言いながら何か集約されていないために、これと言って特に売り込むものがないのが現状だ。絞り込んでより良いものを磨き上げていく。なおかつ、静岡にいる若い人に静岡の魅力の再発見をしていただいて、彼らにその情報を友人や知人、世界の人々に発信していただきたい。私も来週、内閣府の事業で国際社会青年育成事業というものがあるが、ヘルシンキ経由でリトアニアとオーストリアに団員11名を連れて行ってくる。内閣府から与えられたテーマは自国文化とアイデンティティだ。いま学生たちは一生懸命自分たちの実家のある日本の文化、アイデンティティを調べたり、リトアニア政府から日本の若者の生産額や文化

やコミュニティはどうなっているのかと投げかけられているので、やはりまちづくりを盛り上げていくには高校生、大学生あるいは若いネットワークを持っている人達の協力が必要だと思っている。もちろん、観光客、特にインバウンドのお客様が増えるとさまざまな問題が増えるのは分かっているが、逆に言うと、より良いお客様に静岡に来ていただき静岡はいいなと思っていただく。もう一つの可能性として、静岡市がインバウンドのお客様にとってハブの街になり得る。東京や京都がいっぱいいっぱいになっているなかで、新幹線とくにジャパンレールパスを使っているお客様にとって、静岡を拠点に東京や京都に行くのは非常に便利だ。そういう情報発信をして静岡にもっと滞在していただきながら、静岡と日本人の人達の文化、普通の一般の人達の生活を体感していただきながら、観光や文化を共有していく。そして、長期滞在型というものができていけばいいと思う。

杉山茂之委員：どうやって魅力を外に発信していくのか。しかも分かりやすく、ターゲットをどういう風に設定して発信していくか。皆さんの話を聞いていて考えてもなかなか的を絞れない。歴史文化は非常に興味あるところだが、伝え方については、あまり専門性が高くなるとターゲットが狭くなる。どういう人たちにどういうツールを使ってどういう風な訴えかけ方をすれば来てもらえるのか。話は変わるが、私はカーブスに関心がある。カーブスが伸びたのは、利用する方々のいろいろな不満を解消していったことにある。鏡を一切置かないとか、漕ぐのがきついのを油圧を入れてやさしくしたりとか、女性だけなので男性の目を気にしたり化粧をする必要がないとか、何をどういう視点で見るかによって随分と発想が変わってくると感じている。今回の議論の中でネットワークという重要なキーワードのなかで、どれをどのようにつなげて発信していくか、みなさんと一緒に考えていきたい。

田辺信宏市長：それぞれの委員さんの持ち場があるので、皆さんで視察に行くような機会を作ってもらいたい。

坂野真帆委員：小泉委員が歴史オタクだとすると、そうではない人が大半だという話があった。やはり情報をきちんとキャッチすることが大切だ。静岡の歴史については時代も長く、いろいろな資源があるということはぼんやりと分かっている市民は多いと思う。最近になって世紀の大発見が連発しているということで関心を持っている方もたくさんいると思う。市の方もいち早くそれを市民に公開して説明してくださっている。1月の天守台のところの石垣などは発掘調査を手伝うことも一般の方ができるという形で、ずいぶん開かれた形で歴史を紹介してくださっている印象がある。このネット社会において、いろいろなアンケートなどで、何で知ったか、なぜここに来たかと聞かれると、過半数の方々が口コミだという。どういう風に情報を届けていくか、この多様化した時代においてなかなか難しい。そのなかで、やはりしゃべる口を多くすることが大切だと感じている。歴史文化施設に関わる、私も関わりがある、そういう人をどれだけ増やすかがすごく肝になるのではないか。歴史を専門的な形で捉えている方だけではなくて、一般の市民の方が自分たちの生活のなかで静岡の歴史と関りがあると実感できる機会をたくさん設けていくこと

が重要ではないか。

田辺信宏市長：杉山委員が前半おっしゃっていたように、どう伝えるかというのは大変な議論になると思う。今回の第８期は多種多彩なバックグラウンドを持った方々にお集まりいただきチーム田形を編成した。いまひととおり意見を聞いただけでも切り口がたくさんあって取りまとめに苦労するなという第一印象を持った。幅広い議論になろうかと思うが、そのなかでキーワードはビジネス感覚だ。それを持って行財政改革という切り口で提言していただきたい。経済人の方を今回多めにお願いしている。後ろに控える職員は公務員なので立ち位置が違うと思う。みなさんの発言を受け止めるという立場と、行政が今までやってきたことのギャップというものがあるかと思う。そこのところは厳しく議論をしていただき、事務局主導の審議会にならないようにお願いしたい。論点の整理などは私ども事務局の方でさせていただくが、ぜひ尖がった答申を一つでも二つでもいただければありがたい。冒頭申し上げたとおり、時代の変遷とともに行革審に求められる性格も変わってきた。20 世紀の時には同じ行政の審議会の中に公害対策審議会という名前のものがあったが、いまは環境問題審議会と名前を変えて少し広くなっている。それと同じように行財政改革推進審議会というのもネーミングを変えた方がいい時期に来ているのかもしれない。コストカットではなくコストクリエイト、そんな審議会にしていただきたい。数ある行政の審議会の中でこの行革審は権威がある。ここでの答申は市議会も一目置く。ここで答申されたことは尊重しなければならない。そういう伝統もあるので、ぜひ一つの想いを行政に反映していただくような気持ちで、ぜひ半年間よろしくお願いしたい。

田形和幸会長：ビジネス感覚という点で、行政だけでなく私たち民間も一体となって静岡市を盛り上げていくということが大切だと思う。資源はたくさんあるのでそれを情報発信でくっ付けていく、そういう議論をしていかなければならない。時間の許す限り議論をして、皆さんの意見を集約させ、自信を持って答申できるような内容に仕上げていきたい。皆さんのご協力をお願いしたい。

田辺信宏市長：会長、たまには市長に声をかけていただきたい。今日は岩井委員が一人だけ参加できずに残念だが、西尾委員も県外からこのために駆けつけてくださっている。日程調整が大変だと思うが、正式な会合はあるが、プラスして現場に行ってみようということでもいいし、夜に懇親会をやってもいいし、その時には市長にも声をかけてほしい。また、事務方も一生懸命下支えをさせていただきたいと思う。ぜひチーム田形に御貢献をお願いしたい。

総務局長：本日は貴重な御意見をいただきありがとうございました。これからの審議にあたり、幅広い分野でいろいろな視点で議論をしていただけるという印象を持ち、すごく期待をしている。市長の方から私たち事務方に関して厳しい意見もあったが、ぜひ厳しい意見も含めて、私たちではなかなか気付かない点など御指摘いただき、今後よりよい歴史文化施設、またそれを取り巻くまちづくりにつなげていきたいと思う。

観光交流文化局長：歴史文化施設は１丁目 1 番地ということで、市長の５大構想の中でも

力を入れているところだ。私の公務員生活三十数年のなかで歴史文化施設がこれだけ注目されている時期はいままでなかったと思う。これを観光に活かして、民間活力を使っていこうという機運が非常に盛り上がっていると感じている。ぜひ皆さんの意見を活用させていただき、進めていきたいと思っている。

田辺信宏市長：数年前の議論で、思い切って中堀に船を浮かべて観光資源にしたらどうかという提言をいただいた。先月、静岡新聞 SBS グループが駿府城祭り「水祭」ということで、これを実証実験の３回目としてやって、1,500 円取ったが全て満席だった。かなり事業化に向けて進んできている。この環境を作ったのが都市局だ。規制緩和などいろいろなことをしないとできなかった。その功労者である都市局長からひと言お願いしたい。

都市局長：ビジネス感覚とあったが、我々はいま公園とか道路とか施設を管理している。昔は管理するだけだったが、今は儲けようとか、市民の方に使っていただこうということで、エリアマネジメントやパーク PFI という制度を使う取組をしている。民の方々の力を借りて有効に活用していこうという動きがある。もう一点は、ＭａａＳの話があったが、フィンランド等はだいぶ進んでいるが、やはり歴史もあるのですぐには外国のようなものは無理かもしれないが、そちらに向けていろいろな勉強をしている。ネットワークについてはいろいろな移動手段として、やはり足がどうしても必要になってくる。我々はまちづくりと、足づくりという言い方をしている。この答申についてもいろいろな御意見をいただきたい。

田辺信宏市長：昨年度は登呂遺跡に点としてスポットを当てたが、それを面にしていただきたいというのが２年目である今回の諮問のテーマでもある。縦割りにならずに局間連携で、総務局、観光交流文化局、都市局が常にオブザーブとしてつく。昔の行革審は所管が総務局だから総務局しか議論を聞いていなかった。答申が終わってから所管局にお願いしていたが、それだと他人事というか、そこからだと遅い。そうでなく、皆さんが議論をしている時から観光交流文化局にも来てもらう。規制緩和してもらうには都市局も必要だから都市局にも来てもらう。答申ができたときには議論のプロセスを聞いているから、分かっているということで当事者意識を所管の方でも持つことができる。その代わり、そうは言ってもなかなか難しいということも局の方から発言として飛び出すかもしれない。立ち位置がそれぞれに異なるから当然だと思う。そのなかで実のある議論をしていただくための仕掛け、局間連携あるいは官民連携の仕掛けを作らせてもらった。ぜひ闊達な議論の場にしていただきたい。

事務局：以上で意見交換は終了とする。市長はここで退席させていただく。

≪市長退席≫

事務局：続いて、諮問事項の内容について、事務局及び観光交流文化局から説明させていただく。まず、事務局から諮問事項について説明を行う。

≪事務局より説明：略≫

事務局：続いて、観光交流文化局より「歴史文化施設」について説明を行う。

≪観光交流文化局より説明：略≫

小泉祐一郎委員：歴史文化施設がどの位の大きさで、どの場所にあって、というような大まかなイメージ、概要について次回の議論の際に説明してほしい。

小島孝仁委員：歴史文化施設の隣接地について、一般にこれからコンペで意見を求めるということだが、先ほど PFI ということも出ていたが、こういう特別な土地で、土地だけを借地で民間に貸し出すとなると、まず土地を担保に入れられないから、資金力があるところしか参加ができないと思う。歴史文化施設を観光の拠点にするためには、隣接地に何を作るかが極めて重要だと思う。何を基準に民間事業者を選ぶか。そこに歴史文化施設や今回のネットワークを活かせるようなアイデアというものが極めて重要だ。公募条件として、高さが歴史文化施設よりも高い施設を作るのは望ましくないということだが、角度的に富士山の方を見せようとすると、どうしても歴史文化施設が邪魔になり遮ってしまうので、お堀から富士山を見せるのであれば、どうしてもある程度の高さが必要だ。その辺り、公募の条件の中に、景観を生かすという視点も考慮していただきたいと思う。

観光交流文化局長：所管の局が企画局というところで公募の条件をいま詰めている。いま言われたような資金の問題、高さの問題がどうなっているか、私はいまは承知していないが、その旨は企画局に伝えさせていただく。公表できる状況ではないかもしれないが、報告できることがあれば次回報告させていただく。

事務局：ただいまいただいた御意見については今後の審議に反映していく。それでは、議事に入るが、静岡市付属機関設置条例第６条第３項の規定により、ここからの議事進行は田形会長にお願いしたい。

田形和幸会長：それでは次第に沿って議事を進める。次第の４、平成 30 年度行財政改革推進審議会答申に対する施策案について、所管局から説明お願いしたい。

≪観光交流文化局より説明：略≫

小泉祐一郎委員：イベントの関係で民間業者を呼び込むときに、条件をこちらで設定して募集する方法もあるが、どういう条件だったら民間の人が来てくれるのか、サウンディングというか、逆に条件を民間の人に聞くようなこともやられたらどうか。いくつかのイベントで、第一日曜日にこの場所で定期的にやっていくことで成功している例がけっこうある。イベントをいつにやると告知すること自体が大変だ。山梨などの他県などでも、第一

日曜日はここでイベントがあるというような形でPRしていく。一回限りのイベントを実施する方法もあるが、ある程度継続的な利用を考えて、実施する方のやり方をうまく取り入れてやった方がいい。役所の方で条件を決めてやっても、1回限りで、それ以上の発展性はないような気がする。最初は少人数でやっていたのが、定例日でやっているということでどんどん出店者が増えていった朝市などのイベントもある。要は、どうやったら民間の人が出店してくれるかということをまずは探ってみて、試行的にいろいろとやってみる。その場合にネックになるのは、登呂博物館の場合は駐車場だ。利用者があそこの広場のところまでキッチンカーなどで入ることは可能なのか。その辺もうまく配慮していただければいい。

登呂博物館長：将来的には、毎月第一日曜日には何かのイベントをやっているというように定着させて、なるべく地域の方にいつも何かをやっている場所というイメージを持っていただけるように民間の方を誘致していきたいと思っている。

小島孝仁委員：田んぼで泥遊びをする案はなくなってしまったのか。泥遊びの一つの役割というのは、泥に入って遊ぶ人は極めてパーセンテージは低いと思うが、やった方はSNSで発信してくれる可能性が高い。あとはメディアが取り上げてくれるネタにはなる。水田の一部でもいいので、泥遊びスペースとシャワーブースを設けていただきたい。

登呂博物館長：泥遊びは計画の中に入れている。体験メニューの定着化というところで、実施に向けてのハードルを調べてから取り組んでいきたい。

小島孝仁委員：最初に市長に泥遊びをしていただいたらメディアも取り上げてくれるのではないか。

西尾真治委員：答申の内容を受けてこういう施策をやっていくということで作られているが、非常に丁寧に対応されていて、なかなかここまでやっている例は他の市にはない。ここに2030年の目指す姿が書かれている。すごくいいことだが、これらは実際に達成できたかどうかの検証ができる姿になっているかというと、少し抽象的で分かりにくい気もする。例えば先ほど紹介したヘルシンキの例だと、2025年までに自家用車がなくても自由に市内を移動できる状態を実現するということであれば、それが実際に達成されているかどうか検証ができる。そういうものを目標に設定しないと、あまり抽象的な目標だと、それに向けて何をすればいいのかを絞り込みにくい。アウトカムの成果目標で設定されているのが博物館の入館者数で、最終的なアウトカムとしてはこれでいいと思うが、もう少しその手前の中間アウトカムを設定して、やろうとしている施策がアウトカムにつながっているかどうかを検証できるようにする必要があると思う。3つの柱があるが、訪れた人が楽しむということができたのかどうか検証できるようなもの、例えば満足度調査をしてもいいし、楽しんだ人はリピートでまた来てくれるだろうということであればリピート率を取ってもいいだろう。そういう中間的なアウトカムを設定して、それが打った施策に対して効果に結びついているだろうかというような、施策を見直していくことをやられたらいいと思う。例えば市外からの誘客を図るということであれば、SNSを見て

来たのかどうかを聞いたり、観光ルートを通じて来たのかどうかを確認したり、そういうことで施策の効果を確認する。愛着を育むことについても、シビックプライドを醸成していくということはどういう指標で見ていけばその達成状況が確認できるかも少し考えて、アウトカム指標を設定し、効果を検証していくという観点があるといい。

登呂博物館長：アウトカムの設定については、今後事業を進めていくなかで見直しながら検討させていただきたい。

小泉祐一郎委員：たまたま先々週学生を連れて千葉県の調査を行った。清水公園と言って、民間が作って民間が運営している公園がある。そこのフィールドアスレチックは中学生以上が入場料 1,000 円で小学生が 700 円だった。先ほど小島委員が泥んこ遊びのことをおっしゃっていたが、フィールドアスレチックは失敗すると下の泥の中に落ちてしまう。学生たちは落ちたときにはきちんと泥を流して取っていた。そんなこともあるので、水田の一部をぜひ入場料を取って、シャワーも付けた形にすることも御検討いただきたい。

田形和幸会長：中学生の孫が東京から１泊２日で登呂遺跡に来た。三保に泊まって、日本平に行って、そのあと登呂遺跡に行ったという。東照宮には行かなかったようだ。登呂遺跡で何をしたのか聞いたら、体験するところがなかったから見学をしたということだ。体験したり、滞在というか、泊まれるようなところも必要など、いろいろな御意見が出たが、やっていくなかでグレードアップしていくなど、できることをやっていただきたいと思う。他に意見がないようであれば、ここで 10 分間の休憩を取りたい。

≪休憩≫

田形和幸会長：会議を再開する。次第の５、第３次行財政改革前期実施計画実績報告について、全体の実績報告を事務局から説明をお願いしたい。

≪事務局説明：略≫

田形和幸会長：ただいまの説明に対し、意見や質問等があればお願いしたい。特になければ、続いて行財政改革前期実施計画に登載されている取組の中から、３件について取組の内容を説明していただく。まず、１件目の「市民活動への参加の促進」について所管課から説明をお願いしたい。

≪市民自治推進課より説明：略≫

田形和幸会長：ただいまの説明に対し、意見や質問があればお願いしたい。

小泉祐一郎委員：清水の方によく学生を連れて行くが、清水のセンターにはお世話になっている。この数字には乗ってこないと思う。予約しないで突然押しかけているから。何を言

いたいかというと、こういう数字に出てこないようないろいろなサービスを実際にはやられていると思う。要は、センターに登録して利用している人たちの状況は出ているが、私たちのようなそうではない団体も押しかけて利用している。多様なニーズにも対応していただいているので、その辺りも、統計的に取れという意味ではなく、周知していただけるとよい。

市民自治推進課：この数値には出てこないが、相談や電話での問い合わせなどもあり、委員より御案内いただいたとおり、多くの御利用をいただいているとは思う。

田形和幸会長：その他に御意見等がなければ、２件目の「民間等と連携した市民サービスの向上」について所管課から説明をお願いしたい。

≪地域リハビリテーション推進センターより説明：略≫

田形和幸会長：ただいまの説明に対し、意見や質問があればお願いしたい。

小泉祐一郎委員：親の介護を５年ほどしたが、静岡市内の民間のレンタル業者の方は、職員も良くて会社も良くて非常に助かった。ここに展示しているものを民間の企業の方も見ることができるのか。一般の市民の方だけでなく、企業の方にも最新の機器を見て実際に体験してもらえると、自分の会社で買って、一般の市民の方にレンタルすることができる。そういう流れもあるという理解でよいか。

地域リハビリテーション推進センター：こちらの青いチラシの専門職向け研修に企業の方に御参加いただいた場合に体験していただけるし、事業者の方から職員研修の一環として施設見学をしたいという依頼も年間で何件か受けている。そういう機会に最新の機器を体験していただいている。

田形和幸会長：その他に御意見等がなければ、３件目の「人材育成ビジョンの推進」について所管課から説明をお願いしたい。

≪人事課より説明：略≫

田形和幸会長：ただいまの説明に対し、意見や質問があればお願いしたい。

小泉祐一郎委員：なかなか人材育成は大変だと思う。仕事が忙しくなってしまい、係長などの先輩職員が若い職員の面倒を見ている暇がないのが全国的な状況だ。今日の行革審も課長や局長等、上の方々が来て御説明をいただいているが、むしろ30代くらいの主査の方に説明をしていただくなど、やはり場を提供することが必要ではないか。役所の場合は一定の立場にならないとなかなかチャンスがやってこない。資料は作っているが話しているのは上の方ということで、それが上の仕事ではあるのだが。機会を捉えて若手の人に出てもらう、舞台に乗せることも必要だ。たまたま島田市の行革の委員をやっているが、島田市では行革委員のうちの２人は新規採用職員で、新職１年目、２年目の若手が行革の

委員になっている。結構いい意見を言っている。なかなか上の人が指導する暇がないので、そういうチャンスを作って自ら育ってもらうというのもいいのかなと思った。

内山和俊委員：資料に「自ら成長する意欲（熱意）」の「（6）第一線で活躍する再任用職員の育成」とあるが、ある程度の年齢になってくるとスキルやパワーが落ちてくる状況が見られる時もあるが、再任用職員がやる気を落とさないような仕組みづくりが非常に重要だと思っている。その点についてはどうか。

人事課：仕事のモチベーションを落とさないように、4月に再任用職員の研修を行っている。先ほども触れたが、短時間で習得できる実務スキル講座ということで、予算の関係や公文書、会計事務のような業務に直結するような研修を実施し、実際に再任用職員が再度会計事務をやるということもあり、何人かの再任用職員の方からは積極的に参加いただいている。そうした研修も含めて、再任用職員が活躍できるようなことを考えていきたい。

内山和俊委員：特に技術的な職場においては、技術力のノウハウの継承が非常に重要になる。特に過去において優秀な職員がたくさんいた年代もあったし、技術職員の採用が中断している時期もあった。建築職とか土木職が一番多いと思うが。そういう採用がまばらな時期のある職種については技術の継承が非常に重要だと思う。そこはしっかりと継承していただきたい。

田形和幸会長：離職率はどうなのか。私たちはだいたい7年目くらいの教育体制を作っている。そこから後は、職務に応じた外部試験を受けさせている。公務員だからやめる人は少ないと思うが、その中でも離職率は把握されているのか。

総務局長：直接の数字は持っていないが、ほとんどないに近い。ゼロではなく、個人的な理由によって転職する人はいるが、いわゆるマスコミなどで離職のことが問題になっているようなことが公務員の世界では起こっていない。先ほど若手職員の活用と再任用職員の活躍の話があったが、若手職員についてはなるべく多くの幹部職員の前で何かを発表するような場ということで、私ども局長クラスの職員が市長、三役とともに集まる局長会議というものが月に1回あるが、そういう場で若手職員がプロジェクトチームで計画をまとめたものを発表するとか、海外出張の経験をその場で発表するなど、なるべく若手職員が活躍する場を作り出すこと。また、再任用職員については、内山委員がおっしゃったように、特に技術職員については特殊な技術を持っているので、65歳と言わずにまだ残ってほしいと思うような場面も多々ある。現職時代に技術の継承をするほか、再任用になってもしていただかなければならないし、足りない部分については民間経験者枠での技術職員の採用をしているところだ。

小島孝仁委員：会社を設立して10期目になる。設立当時から主に経済局や企画局の方々、同年代であったり、最初は私より10歳以上、上の方々にいろいろと相談に乗っていただいたり、その部下の方々とも何でも気軽に相談できる関係がこの10年で築けたと思っている。そこからさらに若手の方々、うちの会社もこの10年の間に社員が増え、若い社員も一緒にそういう方々と時間を作っている。何かあればすぐ近くということもあり、本当

によくいらっしゃる。私も以前サラリーマンで勤めていたとき、社内の世界だけで社外との交流がない社員と、外部と違う業種の方々と積極的に交流している社員とでは、視野の広さや物事の考え方の切口の広がりが違う。もっともっと積極的に民間や同年代の人達とお付き合いされると、より官民連携を作っていくうえで役に立つのではないかと思う。

総務局長：本当にそのとおりだと痛感している。今日は人材育成担当もいるので、職員向けの情報紙などで行革審の委員さんからこんな意見もあったと発信させていただきたい。

田形和幸会長：当銀行に市の方が一人見えて、うちの金庫からも市にお世話になっている。女性の方だが非常に積極的だ。サポート部というところで、お客様のいろいろな支援をしている。毎年お客様を連れて海外視察に行くのだが、それにぜひ参加をしたいと言い、一緒に行くことになった。それには市の許可がいるのか。

人事課：許可は必要ない。

田形和幸会長：人材交流をしている中では非常に積極的で頼もしいと思っている。他に御意見がないようであれば、本日の議事は以上で終了する。

静岡市行財政改革推進審議会

田形和幸